

Annual

B u l l e t i n

東海大学文明研究所所報 2017

Report

2017

巻頭言

本学所蔵文化財の保存と活用について

山本 和重

文明研究所所長
文学部歴史学科日本史専攻・教授

文明研究所では2016年度から、人文学の活性化と、本学が所蔵する文化財の保存・活用を二つの柱として、研究活動を展開している。昨年度の本欄では、主に人文学の活性化をめぐる研究活動について記したので、今回は本学が所蔵する文化財の保存・活用をめぐる研究活動について記すことにしたい。

文明研究所では、本学が2004年に購入した「アンデス先史文明に関する遺物」（アンデス・コレクションと通称）を保管している。同コレクションは、土器、織物、金属器、木製品など総点数1692点、紀元前1000年ごろのアンデスの文明確立期から16世紀植民地時代初期までのほとんどの時代と地域を網羅するもので、国内最大級のアンデス先史文明コレクションといえる。また本学は、古代エジプト研究の第一人者であった故鈴木八司名誉教授のご遺族より寄贈を受けた、古代エジプト及び中近東コレクション（AENETと略称）を所蔵している。考古資料が約6,000点、写真資料が約15,000点で、なかでもパピルス文書400片は、古代エジプト社会を知る上で非常に貴重な資料である。同コレクションは、文学部歴史学科考古学専攻で保管されてきたが、2016年度に本研究所のコア・プロジェクトとして「東海大学所蔵古代エジプト及び中近東コレクション（AENET）の公開に向けての基盤整備」を展開したことと、文学部の改組との関係から、2017年度から文明研究所が保管することとなった。そこで、文明研究所では、従来のプロジェクトを再編して、2017年度から「東海大学所蔵文化財の活用のための基盤整備」のコア・プロジェクトを開始し、こうしたコレクションの保管・整理、研究、活用を推進している。

アンデス・コレクションについては、その収蔵庫が、当初、同窓会館にあったが、同会館の取り壊しにともない、5号館に移動となった。土器、織物など材質が脆弱なものが多い文化財の移動については、慎重な取り扱いが必要であり、この間、大学運営本部の協力も得て、保存環境の整備などの措置を講じてきた。文化財は人類の遺産として未来に継承していくべきものであり、その保存・継承は、文化財に関わる、最も基本的な活動といえる。遺物の定期的な検査の実施や、そ

のための人材の確保など課題は多い。今後も、保存科学などの専門家と提携しつつ、コレクションの適正な保存・管理をはかっていきたい。

研究機関である大学としては、文化財を保存・継承するとともに、それを研究者等の利用に供して、新たな価値を発見することもまた、不可欠な活動である。この間、古代エジプト及び中近東コレクションについては、オンラインカタログをHP上で公開し、学内外の研究者及び一般の方々に活用していただけるようにするとともに、文学部アジア文学部の山花京子准教授を中心に、コレクションを活用した研究が進められている。工学部との共同研究によって、古代の技術復元や新たな遺物解析技術の構築がめざされており、その成果の一部が、「東海大学古代エジプト及び中近東コレクション所蔵の硫黄ビーズ製ネックレス復元研究—本学における文化財保存修復のモデルケースとして—」として、本研究所の学術雑誌『文明』第22号に掲載されている。引き続き学内における文理融合型の共同研究を推進するとともに、学外の研究者との連携をも視野にいれて、文化財を活用した研究を進めていきたい。

人類の遺産である文化財について、その価値を社会的に発信・普及していくこともまた重要な活動である。アンデス・コレクションについては、2011年に湘南校舎11号館図書館展示室で「南米アンデス地域の生命と自然」展示を、古代エジプトコレクションについては、2015年に横浜ユーラシア館で「古代エジプト ファラオと民の歴史」展覧会を開催して、好評を博してきた。こうした企画展示の開催や、オンライン上での公開などに継続的に取り組みたい。それとともに、他大学の大学博物館の実践に学んで、本学施設での常設展示の可能性についても模索していきたい。

保存・継承、研究、普及、いずれも本研究所のみでは、実現が難しい課題である。引き続き、関係機関のご援助をお願いしたい。

文明研究所の研究プログラム

文明研究所は、本学の創設者松前重義博士の意思を受け継ぎ、学内の幅広い分野からの研究者を結集して、過去の文明、現代文明が抱える問題、これからの文明のあり方について総合的に研究する機関です。

当研究所の発足は1959年に遡りますが、2001年の新文明研究所の設立後は、「21世紀文明の創出」という研究テーマのもと、2015年度まで、おおよそ3年を1期とする研究プロジェクトを策定し研究を推進してきました。第1期「現代文明の展開と社会文化的多様性」（2001年度～2004年度）においては現代文明の多様性を指摘し、第2期「グローバリゼーションと生活世界の変容に関する総合的研究」（2005年度～2007年度）においては地域研究と国際的な研究連携を進めながら、グローバリゼーションの持つ意味を人間の生活変化という観点から捉え研究を行いました。第3期「対話と共生を理念とする新しい社会の構築」（2008年度～2010年度）においては対話と共生の観点から21世紀文明のあり方に対する提言を目指し、第4期「創造すべき21世紀文明」（2011年度～2013年度）においては第3期からの「対話と共生を理念とする新しい社会の構築」をさらに押し進めました。2014年度からは、本学の第II期中期目標（2014年度—2018年度）を受けて、「文明とグローバリゼーション」をテーマとして掲げ、コア・プロジェクトとして「アイデンティティの多様性と共生」、「グローバリゼーション下での社会システムの変容と再構築」、「震災復興と文明」、「文明遺産をめぐる課題」、「超領域人文学（Trans-Disciplinary Humanities）構築に向けた基礎研究」の5つのプロジェクトを実施してきました。

2016年4月の総合社会科学研究所の設置に伴い、文明研究所の研究活動は人文学を中心に進めていくことになり、プロジェクトについても再編成を行いました。2016年度は、21世紀に継承・展開すべき人文学の構築と、本学が所蔵する文明遺産の整備・研究・活用を2つの柱として、「超領域人文学（Trans-Disciplinary Humanities）構築に向けた基礎研究」、「20世紀人文学の方法論的再検討」、「文明遺産をめぐる課題2」、「東海大学所蔵古代エジプト及び中近東コレクション（AENET）の公開に向けての基盤整備」の4つのプロジェクトを実施しました。2017年度も二つの柱に即して、「超領域人文学（Trans-Disciplinary Humanities）構築に向けた基礎研究」、「20世紀人文学の方法論的再検討」、「東海大学所蔵文化財の活用のための基盤整備」を推進するとともに、学部を超えた共同研究である「森里川海研究プロジェクト」、「戦後大衆文化に関する基礎的研究—緒形拳関係資料の整理をめぐる—」についても、本研究所の課題として展開しています。さらに、2015年度から主催してきた国際シンポジウム「文明間対話」の第3回を今年度も開催し、国際交流の継続と、若手研究者や院生の育成をはかっています。

2017年度の研究プロジェクト

「超領域人文学（Trans-Disciplinary Humanities）構築に向けた基礎研究」

（コア・プロジェクト1）

平野葉一・沓澤宣賢・田中彰吾
中川久嗣・吉田欣吾・中澤達哉
鷹取勇希・服部泰・中村朋子

本プロジェクトは、東海大学の特色である文明研究を基盤とした未来型の人文学構築を目指す研究プロジェクトで、2017年度が3年目となる。昨年度と同様に今年度も「人間とは何か」という主たるテーマの下で、学問の枠組みを超えた人文学研究の手法について検討を重ねたが、具体的には人間の英知や技術に対して科学史、芸術、言語社会学、記号論、心理学などの各視点からテーマを選んで研究会を行った。また、本プロジェクトでは文学研究科文明研究専攻の大学院生と博士論文を準備している出身者の参加を促しているが、とくに2017年度は文学部からの支援もあり、大学院生たちのそれぞれの研究テーマに対して幅広い分野からの意見交換や検討を目的に毎月2回程度の研究会を開催した。

全体をとおしては、人間営為に対する「文化」、「文明」の意味について再検討することが重要となり、Kroeberや伊東俊太郎などの研究者の先行研究を再考し、例えば「日本の幕末明治期における西欧科学の受容」や「ルネサンス期の芸術と科学の関わり」、「近代学問の形成と教養の成立」、「フランス革命期以降の近代国家形成」などといった個別なテーマに対する複数の学問領域からのアプローチへと展開させた。

これらの研究成果の発表として、2015年度から開催している国際シンポジウムを、2018年3月にデンマークの東海大学ヨーロッパ学術センターで開催した（別項参照）。

なお、本プロジェクトでは2016年度に開催した国際シンポジウムでの各発表を論文の形で整理し、2017年10月に『文明』（特集号）として発刊した。

「20世紀人文学の方法論的再検討」

（コア・プロジェクト2）

山本和重・田尻祐一郎・村田憲郎・馬場弘臣
川崎亜紀子・篠原聡・斉藤仁一郎

本プロジェクトは、2016年度から文明研究所が人文学を中心に研究活動を展開することになったことを受けて、新規に立ち上げた研究プロジェクトである。人文学に対する社会的評価が低下するなかで、その活性化のために、20世紀人文学の方法論を歴史的な視点からふりかえり、21世紀に継承すべき方法をさぐることを目的としている。その問題関心の背景にあるのは、19世紀的な工業化型近代化や技術万能主義に照応した科学主義的人文学に対して、20世紀には、哲学、歴史学、民俗学、教育学など、さまざまな領域から反省と新たな方法論が提示されてきたが、それらの成果が必ずしも今日の人文学に継承されておらず、そのことが人文学における方向性の喪失状況、ひいては人文学に対する社会的評価の低下につながっているのではないかという認識である。こうした認識の可否を含めて、学問領域を超えた共同議論によって、人文学の可能性を探ろうとするものである。

昨年度の第1回から第3回の研究会に続いて、今年度も下記のように研究会を3回開催した。そのうち第5回については、学外（神奈川大学）から講師を招聘し、公開研究会として開催した。また、この間の研究活動の成果を、『文明』第22号に、山本和重「巻頭言 社会史と教育運動」、安田常雄「20世紀学問思想論」、斉藤仁一郎「カリキュラム研究史に見る「近代」に関する再解釈—20世紀前半の米国社会科教育史に焦点をあてて—」として発表している。

第4回（2017年6月30日）：田尻祐一郎「戦後の日本思想史研究をふりかえる」

第5回（2017年11月25日）：安田常雄「20世紀学問思想論」

第6回（2018年2月24日）：田中彰吾「20世紀人文思想における身体を振り返る」

次年度は、これまでの共同研究の成果を、シンポジウムという形態で社会に発信したい。

「東海大学所蔵文化財の活用のための基盤整備」

（コア・プロジェクト3）

山花京子・吉田晃章・篠原聡・田口かおり

本プロジェクトでは11号館に収蔵されている古代エジプト及び中近東コレクション（AENET）（以下、エジプト・コレクションとする）と5号館1階に収蔵されているアンデス・コレクションの活用に関わる環境整備と保全を目的としている。本プロジェクトに関し

て、本年度は国際学会発表3回、国内学会発表4回を行い、文明研究所（共催）の学会を1回開催した。

以下では1) アンデス・コレクションと2) エジプト・コレクションについてそれぞれの進捗状況を記す。

1) アンデス・コレクション

2017年度は5号館の改修工事に伴う長期閉鎖により、約7か月間、5号館のアンデス・コレクション収蔵庫に立ち入ることができなかったため、アンデス・コレクションに関する年間計画予定は遅れているが、以下の点について達成することができた。

- ・2016年度末より大規模な燻蒸処理と特に織物の整備作業が始まり、2017年4月以降も引き続き織物の整備作業を行った。
- ・庫内の環境を向上させるための大型除湿器の設置工事ともない、遺物の移動や再梱包などを行った。あわせて、台帳と収蔵遺物の照合作業を行った。また一部の遺物について、梱包材の入れ替えを行い、脱酸素剤とガスバリア袋による保全を行った。遺物の照合や保全作業は、2018年度も継続課題である。
- ・2017年5月より金属遺物を対象に保存方法を策定するための予備調査としてNikonインステック社、及び筑波大学大学院総合科学研究科世界遺産専攻（保存科学 金属保存専門）の松井敏也教授の協力を仰ぎ、ポータブル蛍光X線により定性分析を行った。
- ・2017年6月には、5号館改修工事のための準備として、遺物をテンバコとロープを使い簡易耐震補強をする作業を、さらに貴重度の高い資料を安全な場所へ一時保管する作業を行った。
- ・12月には東京芸術大学の金属保存修復の専門家である増淵麻里耶氏を招聘し、アンデス・コレクションの金属製マスクの保存方法と今後の保管方法について学ぶ会を持った。

2) エジプト・コレクション

前年から引き続き、乾燥材の入れ替え、忌避剤の取り換え、庫内消毒などの庫内保全と注記、遺物の整理、台帳記入などを行った。同時にコレクションに関心を持つ学生たちが遺物の取り扱いや、梱包方法、注記、スケッチ、写真撮影、デジタル画像の編集、台帳登録の方法などを学ぶ機会を作っ

た。学生の活動はチャレンジセンターユニークプロジェクト Egyptian Projectとして毎週2回の活動日を設けている（「活動報告参照」）。

- ・エジプト・コレクションを軸に、2016年度より学術的な共同研究が「研究の峰」プロジェクトとして工学部材料科学科葛巻徹教授・工学部材料科学科宮沢教授・工学部応用科学科秋山教授とともに行われている。コレクション遺物に関わる2017年度の成果として、宮沢・山花らは11月にエジプト・アラブ共和国で開催された国際学会 Science of Ancient Egyptian Materials & Technology Conference (SAEMT)にて古代の金属溶接技術についてのポスター発表を行った（「所員の活動」参照）。また、Micro/Nano Technology Center Tokai Universityの国際学会においても、内田・苫米地（文学研究科大学院生）・山花によるエジプト・コレクションのコインについてのポスター発表（「所員の活動」参照）、山花による古代遺物のイメージングテクノロジーによる研究展望に関するポスター発表も行った（「所員の活動」参照）。さらに、山花・秋山は『文明』第22号にエジプト・コレクション収蔵の硫黄ビーズ製ネックレスについての研究ノートを上梓した（「所員の活動」参照）。
- ・エジプト・コレクションを一般に周知するために設置している「遺物カタログHP」<http://aenet.pr.tokai.ac.jp/>に新たにパピルスデータの119件をアップロードした。
- ・エジプト・コレクション資料閲覧申請（学内14件 学外1件 海外2件）があった。

「森里川海研究プロジェクト」

（コア・プロジェクト4）

中嶋卓雄・平野葉一・荒木朋洋・木之内均

本プロジェクトは、2016年4月に震災を受けた九州キャンパスにおける震災復興を視野に入れた環境研究として2017年度から設置した研究プロジェクトである。

九州キャンパスでは、環境省および熊本県との連携による震災復興を目指した研究活動が求められ、文明研究所としては将来的な研究所設置も視野に入れながらコア・プロジェクトとして「森里川海プロジェクト」を設置した。「森里川海」とは環境省が実施している環境教育・研究プロジェクトの名称で、

山地から平野の河川を通して海までの全体の環境を検討することを目的としている。本プロジェクトでは、今年度は熊本県の阿蘇地域から白川などの河川を経て有明海の沿岸域までを対象とした水循環システムに関する水文学研究をテーマに、その研究準備を行った。

その結果、2018年1月に東海大学と環境省、熊本県の三者で「阿蘇地域の創造的復興に向けた地域循環共生圏の構築に関する協定」の締結に至った。本プロジェクトも、今後はこの協定の下で、一方では上で述べた阿蘇草原を中心とする水文学研究として、他方では阿蘇地域の震災復興を目指した地域連携活動として進めることになる。

なお、本研究は科学的（土木などの工学も含む）アプローチが中心となるが、環境問題への取組みとしては人文・社会科学的な研究も不可欠であり、本プロジェクトとしては「環境 QOL の検討」というテーマを設定し、人間の幸福度や満足度を中心に経済や観光などの各分野も含めた検討を計画しており、『文明』第 22 号にその方向性を示している。

「戦後大衆文化の基礎的研究

—緒形拳氏関係資料の整理をめぐる—

（コア・プロジェクト 5）

馬場弘臣・紅谷龍司・兼平賢治・神谷大介

本プロジェクトは、2017 年度に新たに採用された研究である。戦後大衆文化の発展過程については、まだ時代が新しいこともあり、あまり進んでいるとはいえない。そこで本プロジェクトは、俳優故緒形拳氏が残した資料（台本・パンフレット・スクラップブック・写真等）の整理を通して、とくに舞台、映画、テレビといったメディアの発展と、大衆文化との関連について具体的に検討していこうとするものである。また、本プロジェクトは、近現代資料で何を、どのような形で残していけば良いのかという、アーカイブズの課題に関する研究でもある。

本年度は初年度ということもあり、まずは御遺族と打ち合わせした上で、緒形氏の資料を受け入れるところから始まった。8 月に第 1 回目として、台本、舞台などのパンフレット、スクラップブック、写真等の資料を実験棟 F 館 2 階の共同会議室に搬入した。また、資料整理の第一弾として 2018 年 1 月に写真資料の大まかな分類整理を行なった。その上で 2

月には、ウインターセッション科目「史料管理学演習」の授業で台本、パンフレット、雑誌等の整理と目録作成を行なった。詳しくは「活動報告」を参照していただきたい。現在は、資料整理と並行して、緒形氏の全作品のリストづくりも行なっている。

なお、本学附属中央図書館には、緒形氏の恩師である劇作家北條秀司氏の資料が保管されている。これらの資料とリンクさせることで本研究もさらに豊かになるもの考える。その一環として、北條氏が緒形氏を対象として書いた舞台劇「信濃の一茶」を題材に、歴史学と劇作家が描く「小林一茶像」の違いについて、3 月に時代考証学会で馬場が報告した。

まだ、資料整理は始まったばかりであり、次年度早々には第 2 回目の資料調査と受け入れから始めたい。アーカイブズの観点からすれば、この作業過程の記録自体も重要な研究材料なので、その点にも留意して進めていきたいと思う。

『文明』第 22 号（2018 年 3 月発行） 内容のご紹介

巻頭言

- ・社会史と教育運動

（山本和重）

講演

- ・20 世紀学問思想論

（安田常雄）

論文

- ・カリキュラム研究史に見る「近代性」に関する一考察 — 20 世紀前半の米国社会科教育史に焦点を当てて —

（斉藤仁一朗）

研究ノート

- ・東海大学古代エジプト及び中近東コレクション所蔵の硫黄ビーズ製ネックレス復元研究 — 本学における文化財保存修復のモデルケースとして —

（山花京子・秋山泰伸）

研究報告

- ・コア・プロジェクト「森里川海研究」の方向性 — 環境 QOL の導入の一試論として —

（平野葉一・中嶋卓雄）

活動報告

国際シンポジウム

「第3回 文明間対話」

(2018年3月8日、9日)

田中 彰吾

2015年11月、東海大学ヨーロッパ学術センター（デンマーク、コペンハーゲン）において文明研究所およびヨーロッパ学術センターの共催で始まった国際シンポジウム「日欧間の文明対話」は、2017年3月に第二回を開催し、2018年3月に第三回を開催した。当初は日本とヨーロッパを題材にする発表が多かったが、第二回では扱う地域も時代も多岐に及んでいたため、今回から「文明間対話（Dialogue between Civilizations）」に正式名称を改めることにした。今回も、文明研究所のコア・プロジェクト「超領域人文学（Trans-Disciplinary Humanities）構築に向けた基礎研究」（研究代表者：平野葉一文学部ヨーロッパ文明学科教授）を中心とする企画であり、参加者は21名であった。



主な内容は以下の通りである。3月8日、午前の部でオース大学のア・プラッツ氏による基調講演、およびシンポジウム「地球環境と持続可能性」が開催され、午後の部では「超領域人文学1：言語・身体・文化」の個人発表、およびシンポジウム「身体性・文化および自己」が開催された。続く9日は、午前「超領域人文学2：文化と文明の対話」の個人発表、午後には沓澤宣賢文学部歴史学科教授による基調講演を含むシンポジウム「日本文化を再考する」が、それぞれ実施された。

なお、本シンポジウムにおける主な報告内容は個別に論文化され、次年度刊行の『文明』第23号に掲載される予定である。



学部教育等との連携

「エジプト・コレクションとアンデス・コレクション」

山花 京子

- ・エジプト・コレクションを中心に活動しているチャレンジセンター・ユニークプロジェクト Egyptian Project の有志たちが研究を手伝った成果は、松前記念館にて「文理融合」の成果として展示されている（2018年3月現在）。
- ・パピルス修復講座を7月7日～8月5日の間の全5回で実施した。参加学生は6名で、2013～15年のパピルス・プロジェクトで学生修復師の認定を受けた卒業生が在校生の指導に当たった。
- ・山花の授業（考古学特別演習・外国考古学地域研究講義C）では、エジプト・コレクション収蔵庫の遺物を積極的に活用し、学生に取り扱い



エジプト・コレクション遺物を利用して活動中のチャレンジセンターユニークプロジェクト Egyptian Project のメンバー

方だけではなく、石器・土器・陶器・磁器・ガラス・有機物などの素材別にそれらの発展してきた過程を実際の遺物を手にしながらディスカッションする機会を設けた。これにより、学生たちには机上の学習よりはるかに高い学習効果が見られた。

- ・プロジェクトメンバーの吉田も、「アンデス地域の諸文明」授業の中で、アンデス・コレクションの実物を学生とともに観察する機会を持った。

学部教育等との連携

「史料管理学演習と緒形拳氏関係資料の整理」 (2018年2月19日～23日)

馬場 弘臣

史料管理学演習は、文学部歴史学科日本史専攻開講のウィンターセッション科目で、歴史的な史資料の調査・収集・整理・保存・公開について総合的に学ぶ授業である。とはいえ、座学が中心の授業ではなく、現存する史資料の整理の方法について実践的に学ぶことを主としている。扱う史資料については、江戸時代の古文書から近現代のものまで多様な素材を準備し、それぞれに応じた整理の方法を学ぶ。本年度は、文明研究所研究プロジェクト5「戦後大衆文化の基礎的研究—緒形拳氏関係資料の整理をめぐって—」とタイアップし、名優故緒形拳氏関係資料の整理作業を行なった。

履修者は2学年2名(女子)と3学年4名(女子2名、男子2名)の計6名であった。授業では2名ずつ3班に分け、それぞれ①台本、②パンフレット、③雑誌の整理を行なった。具体的に



ダブルフラップフォルダーに収納

は、ダブルフラップフォルダーという上部と右脇にフラップのあるポリプロピレン製のフォルダーに収納し、それぞれに資料番号と種別を印刷したシールを貼った。資料番号は、原秩序維持の原則に従って、それぞれが収納されていた場所ごとにアルファベットと数字を組み合わせてつけている。ダブルフラップフォルダーが一定の量に達したら、リングファイルに綴じ込むようにした。②パンフレットの数がもっとも多かったため、最後は②班を①班と③班が手伝った。

すべての作業を終えると、またそれぞれの班に分かれて、目録作成に移った。目録は、ノートパソコンを使い、直接、Excelのファイルに入力する形で行なった。とくに①台本や②パンフレットについては、書き込みやサインなどがある場合は、その旨も備考に記すように指導した。その結果、今回の授業では、①台本115冊、②パンフレット259冊、③雑誌65冊の資料整理と目録作成を行なうことができた。

古文書であれば、まず読めなければ整理作業もおぼつかないが、今回は印刷物が主であったので、比較的スムーズに整理作業も目録作成も進めることができた。何より学生たちが熱心に取り組んでくれ、授業後も続きの資料の整理を手伝いたいと申し出た学生もいた。このような資料整理・目録作成は、歴史学研究の礎となるものであり、今後も教育とタイアップしていく道を探りたい。



目録作成作業

所員の活動

山本 和重

文明研究所所長・文学部歴史学科日本史専攻・教授

【執筆・翻訳】

- 「アジア・太平洋戦争期の出征兵士家族生活保障—新潟県中頸城郡和田村の事例から—」『軍事史学』第53巻4号, 2018年3月
- 「社会史と教育運動」『文明』第22号巻頭言(東海大学文明研究所) 2018年3月
- 「20世紀から継承すべきものは? 歴史学の視点から考える」『東海大学新聞』第1051号, 知の架け橋・未来を考える②, 2017年5月

平野 葉一

文学部ヨーロッパ文明学科・教授

【執筆・翻訳】

- Yoichi Hirano, "Special Issue: Dialogue between Civilizations", BUNMEI (CVivilization), Institute of Civilization Research, Tokai University (東海大学文明研究所), Special Issue 2017
- Sei Watanabe, Yoichi Hirano, "An essay on Trans-Disciplinary Humanities: As a key element for Civilization dialogue", BUNMEI (CVivilization), Institute of Civilization Research, Tokai University (東海大学文明研究所), Special Issue 2017
- 平野葉一・中嶋卓雄、「コア・プロジェクト「森里川海研究」の方向性—環境 QOL の導入の一試論として—」、『文明』第22号(東海大学文明研究所)、2018年3月

【報告・講演】

- Yoichi Hirano, Kingo Yoshida, Mina Adachi, "A Study on the Mutual Influence of Culture and Civilization, The 3rd Dialogue between Civilizations, Tokai University, Institute of Civilization Research, Co-sponsored by Tokai University European Center, March 8-9, Tokai University European Center
- Takuo Nakashima, Yoichi Hirano, "The Relation Between Human Activities and the Natural Environment — An Essay on the Introduction of Environment-Related QOL —", The 3rd Dialogue between Civilizations, Tokai University, Institute of Civilization Research, Co-sponsored by Tokai University European Center, March 8-9, Tokai University European Center

沓澤 宣賢

文学部歴史学科日本史専攻・特任教授

【執筆・翻訳】

- 「「<日独シーボルトシンポジウム>—没後150年記念シーボルトの知的遺産と日独協力の新しい道」に参加して—」『洋学』24号, 2017年4月
- 「シーボルトと日本」(『社会環境フォーラム21』(2017年9月))
- "The 1873 Vienna World Exposition and Japan's Participation: Focusing on Japan's Industrial Promotion Policy in the Early Meiji Period", Proceeding of the 3rd Dialogue between Civilizations International Symposium, 2018年2月

【報告・講演】

- 「シーボルトと日本」社会環境学会2017年度研究大会, 2017年6月
- 「学園の資料を収集・整理・公開・活用する学園史資料センターの活動」東海大学キャリア就職センター企業懇談会, 2017年11月

田中 彰吾

現代教養センター・教授

【執筆・翻訳】

- 『生きられた〈私〉をもとめて—身体・意識・他者』北大路書房, 2017年5月
- "Intercorporeality and aida: Developing an interaction theory of social cognition" Theory & Psychology, 27(3), pp.337-353, 2017年6月
- "The body as the intersection between individuality and collectivity" Civilizations, Special Issue 2017, pp.128-139, 2017年9月

【報告・講演】(主なもの)

- 「Depersonalization and full-body illusion: A comparative study of the sense of self」国際シンポジウム「From Body to Self in Virtual Reality」にて講演(イスラエル, Interdisciplinary Center Herzliya) 2017年5月
- 「Self and body in depersonalization/derealization disorder」コロキウム「Philosophy, Psychiatry, Psychosomatic」にて講演(ドイツ・ハイデルベルク大学) 2017年6月
- 「Bodily basis of subjectivity and intersubjectivity」第17回国際理論心理学会にてシンポジウム報告(立教大学) 2017年8月
- 「Narrative self and its implications for human sciences」第17回国際理論心理学会にてシンポジウム報告(立教大学) 2017年8月
- 「身体とプロジェクション—錯覚から考える」日本認知科学会・冬のシンポジウム「跳び出す心, 広がる身体: プロジェクション・サイエンスの確立に向けて」にて講演(青山学院大学) 2017年12月

【その他の活動】(主なもの)

- 第17回国際理論心理学会(2017年8月21日~25日開催, 於立教大学)に現地運営委員として参加
- 第81回日本心理学会にて公募シンポジウム「行為から考える「私たち」」の企画・報告および司会(久留米シティプラザ) 2017年9月
- 国際シンポジウム「Body Schema and Body Image」(2018年3月24~25日開催, 於東京大学)の企画および運営

馬場 弘臣

教育開発研究センター・教授

【報告・講演】

- 「相模国における在郷商人とその地域ネットワーク—伊勢原村加藤宗兵衛と大磯宿川崎孫右衛門を中心に—」東洋大学人間科学研究所・共同研究にて報告(東洋大学) 2017年6月
- 「蛤御門の変と小田原藩—「吉岡由緒書」を読む—」古文書を読む会の講師(神奈川県立公文書館) 2017年7月
- 「幕末期佐賀藩の近代化を考える—藩主鍋島閑叟の改革—」東海大学同窓会佐賀支部にて講演(佐賀アバンセ) 2017年9月
- 「揺れる大地, 燃える富士—宝永富士山噴火と相模の村々—」藤沢地名の会にて講演(藤沢市明治公民館) 2017年10月
- 「三浦半島の往還と“海道”」NPO法人よこすかシティ協会にて講演(勤労福祉会館:ヴェルクよこすか) 2018年2月
- 「小林—茶像を考える—劇作家北條秀司と俳優緒形拳—」時代考証学会にて報告(明治大学) 2018年3月

【その他の活動】

- 東海大学エクステンションセンター生涯学習講座
「幕末の歴史を古文書で紐解く1」(ユニコムプラザさがみはら) 2017年5月~6月, 全5回
「幕末の歴史を古文書で紐解く2」(ユニコムプラザさがみはら) 2017年10月~2018年1月, 全5回
- 「歴史学は“論文5年・史料100年”—小田原藩の歴史を捉え直す 東海大学・馬場弘臣教授」『Academist Journal』(<https://academist-cf.com/journal/?p=5833>) 2017年9月
- 「環を繋ぐ者」『Link』Vol.232, 2017年9月
- Webサイトの運営「情報史料学研究所」
<http://www.ihmlab.net/tweet/>

山花 京子

文学部アジア文明学科・准教授

【執筆・翻訳】

- 「古代エジプトファイアンス復元実験—白華技法— Replicating Ancient Egyptian Faience using an Efflorescence technique,」『西アジア考古学』vol.18, 2017年
- 山花京子, 秋山泰伸「東海大学古代エジプト及び中近東コレクション所蔵の硫黄ビーズ製ネックレス復元研究—本学における文化財保存修復のモデルケースとして—」『文明』第22号(東海大学文明研究所), 2018年3月

【報告・講演】

- “Reproducing Ancient Egyptian Faience in Efflorescence Method,” Science of Ancient Egyptian Materials & Technology Conference, 2017, Nov. 4-6, Cairo, Arab Republic of Egypt,
- 「本学所蔵文化財の保存修復に関する基礎的研究(1)—有機・無機遺物の分析と保存への提言—」2 東海大学産学連携フェア 2017 研究交流会 ポスター発表, 2017年9月

- 「エジプトのビーズ面（解説）」国立民族学博物館 世界のビーズをめぐる人類学的研究 口頭発表, 2017年4月
- 山花京子, 池田まゆみ「美術工芸におけるエジプト学の影響—19世紀末エミール・ガレ作品を中心に—」日本ガラス工芸学会・東海大学文明研究所（共催）日本ガラス工芸学会 2017年度大会 口頭発表, 2017年10月
- Kyoko Yamahana, Yasuyuki Miyazawa, et.al., “Metallurgical Analysis at the Brazed joint of Cultural Properties,” Science of Ancient Egyptian Materials & Technology Conference, 2017, Nov. 4-6, Cairo, Arab Republic of Egypt, Poster presentation
- 「古代エジプト壁画にはガラス製作場面はあるのか？」日本ガラス工芸学会・東海大学文明研究所（共催）日本ガラス工芸学会 2017年度大会 ポスター発表, 2017年10月
- “Working together to reveal the Technology of Mankind- An interdisciplinary collaboration between MNTC and AENET (Ancient Egyptian and Near Eastern Collection at Tokai University),” Micro/Nano Technology Center Tokai University, 2017.08, Poster presentation
- 山花京子他「古代地中海世界における知の伝達の諸形態—口承・文学・図像—」日本西洋史学会 第67回大会シンポジウム シンポジウム発表, 2017年5月
- Kyoko Yamahana, Takahiro Hermut Uchida, Miyu Tomabechi, “Ancient Egyptian Coins-an investigation of the production method.”, Micro/Nano Technology Center Tokai University, 2017.08, Poster presentation

【その他の活動】

- 日本ガラス工芸学会 2017年度大会を開催（於：東海大学17号館 ネクサスホール）東海大学文明研究所・日本ガラス工芸学会共催 実行委員長 山花京子
- 望星ゼミナール 「古代エジプト人の生活（衣食住）」望星学塾, 2017年5月19日
- 望星ゼミナール 「古代エジプトの女性の地位」望星学塾, 2017年5月26日
- 望星ゼミナール 「ヒエログリフを知ろう—名前と簡単な文章を書こう—」望星学塾, 2017年6月2日
- 住化ケムテックス講演「古代エジプト人はなぜミイラを作ったのか—ミイラと布」2017年9月
- 東海大学地域連携センター生涯学習講座「古代エジプトを体感する1 ヒエログリフを知ろう（入門編）」2018年1月15日
- 東海大学地域連携センター生涯学習講座「古代エジプトを体感する2 古代エジプト人の死生観」2018年1月22日
- 東海大学地域連携センター生涯学習講座「古代エジプトを体感する3 古代エジプトの「色彩」」2018年1月29日
- TOKAI クロスケア ワークショップ 「古代エジプト謎の物質 ファイアンスを作ろう」2017年7月
- 日本セカンドライフ協会「古代エジプトの神オシリス・イシス・ホルス」2018年1月
- 日本学術振興会 エジプト・アラブ共和国 カイロ研究連絡センター「神秘の「青」の魅力を追いかけて— 古代ファイアンスの白華技法による復元実験—」2017年11月

篠原 聰

課程資格教育センター・准教授

【執筆・翻訳】

- 「浮世絵末流の近代（その5）—「新浮世絵」断章—絵画の触覚性をめぐる冒険」『美術運動史』no.160, pp.15-20, 美術運動史研究会, 2017年4月
- 『「触覚（haptic sense）」と鍋木清方の文学体験—新浮世絵断章その2』『美術運動史』no.165, pp.6-12, 美術運動史研究会, 2018年2月

【報告・講演】

- 市民講座「ユニバーサル・ミュージアム 美術鑑賞の新たな可能性」鎌倉市鍋木清方記念美術館, 2017年4月
- 江東区森下文化センター平成29年度後期 伊東深水生誕120年記念講座 伊東深水 美の系譜「浮世絵末流の近代 清方から深水へ」森下文化センター, 2018年2月

【その他の活動】

- 「基本は現代文明論 教育の源流を顧みる」松前記念館 2017年度企画展
- 「6 観光イノベーション計画『文化・芸術事業』文化芸術を基盤とする地域社会の創出を目指して」（『TOKAI ENGAGEMENT』pp.42-47, 東海大学地域連携センター, 2018年2月
- 「無視覚流アート論 vs Kinesis ~絵画を触覚する, 制作者と鑑賞者の《気》の対話」イベント報告書, 東海大学課程資格教育センター, 2018年3月発行予定
- 『彫刻と生きる ユニバーサル・ミュージアムが地域連携の扉をひらく』公開シンポジウム4 報告書, 東海大学課程資格教育センター / 松前記念館, 2018年3月発行予定



東海大学文明研究所所報 2017

発行人 山本和重

発行日 2018年3月31日

発行所 東海大学文明研究所

神奈川県平塚市北金目 4-1-1 〒259-1292 tel.0463-58-1211 ext.4900 ~ 4902 fax.0463-50-2050